

インタビュー

# 地域づくりは 未来の住民に対して 責任を持つこと

建築家 山本理顕



201

『パンギョ・ハウジング』  
Photo by 佐武浩一

## 「1住宅11家族」 システムの破綻

**萩原** 山本さんが設計される住宅は、外観のほとんどがガラス張り、玄関や居間も外からまる見えの斬新なものです。これらは独立した住居というより、他の住宅や地域社会とかかわりを持ち、家族のみならず地域といっしょに住むための空間という印象を受けます。住宅の枠を越え、地域社会のあり方を設計する「地域社会圏」という山本さんの考え方についてお話ししていただけますか。

**山本** 日本全体が、今ピンチだと思っんです。高齢化、少子化の中で、合計特殊出生率（1人の女性が一生に産む子どもの平均数）は1.3前後です。人口を維持するためには2.1レベルが必要ですから、1.3という数字は異常な数字なんです。2015年には、日本の高

齢化率は26%程度になりま  
す。4人に1人は65歳以上  
の高齢者です。都市部を中  
心に、高層マンションがこ  
れまでの都市景観とは無関  
係につくられています。僕  
はこんな開発の仕方をしてい  
ていいとは思っていません。  
30年後に高層マンションは、  
設備も含めて買ったときと同  
じくらいの額のメンテナンス  
費がかかると思います。私た  
ちの生活に適しているとはい  
えない高層マンションがなぜ  
できるのか分かりますか？

**萩原** なぜなのでしょう？

**山本** 売りやすいからです。  
大量の床面積を安くつくれ  
て、売りやすい。なぜそれ  
でも売れるかというと思う  
人が自分のことしか考えな  
いからです。自分の財産だ  
と思っ買って置けるからな  
んです。そうすると、床面  
積が大きくて安くて、駅に  
近ければいいわけです。周  
りに誰が住んでいようが関

係ない。駅に近くて、眺望  
がよく、安ければ買います。  
自分の財産なので、次に売  
りやすければいい。それはど  
ういうことかというところ、周  
りの人のことは関係なく買っ  
近隣がどのような環境かも関  
係なく売れる。こんな恐いこ  
とはないと思いませんか。こ  
のままでは、50年後には建  
物だけでなく地域社会全体  
が廃墟のようになります。

農村の人口は都市部より  
もっと急激に減少し、激し  
く高齢化しています。こう  
した私たちの内側の、ある  
いは外側の大問題はそれぞ  
れ断片的で相互に無関係に  
見えて、どうしたらいいの  
かも分かりません。日本は  
まるで八方ふさがりの金縛り  
状態で、それを多くの人がひ  
しひしと実感しています。

では、こうした大問題を  
どのように解決するのか…。  
秘策は私たちが住んでいる  
住宅を改めて見直すことで  
す。というの、大問題の  
病巣の中心は実は住宅にあ

やまもと・りけん

1945年生まれ。1968年、日本大学理工学部建築学科卒業。1971年、東京藝術大学大学院美術研究科建築専攻修了。1973年、山本理頭設計工場設立。2007～2011年、横浜国立大学大学院教授。2011年から横浜国立大学客員教授、日本大学特任教授。  
代表作に、岩出山町立岩出山中学校（毎日芸術賞）、埼玉県立大学（日本芸術院賞）、公立はこだて未来大学（日本建築学会賞作品賞）、東雲キャナルコートCODAN（グッドデザイン賞金賞、BCS賞特別賞）、横須賀美術館（神奈川建築賞、BCS賞）、福生市庁舎など。  
チューリッヒ、天津、北京、ソウル、アムステルダムなどでも複合施設、公共建築、集合住宅を手掛ける。主な著書に『新編 住居論』（平凡社ライブラリ）、『つくりながら考える／使いながらつくる』（TOTO出版）、『地域社会圏モデル』（INAX出版）など。



インタビュー  
萩原 忍

東京葛飾医療生協 理事

るからです。今、私たちが住んでいる住宅は、ひとつの住宅にひとつの家族が住む「1住宅＝1家族」という住み方を理想として開発され、供給されたものです。例えば、35㎡くらいの空間に家族4人がプライバシーを大切にしながら住む。そうした住宅が、戦後復興住宅として供給されました。地域社会の中で生活をしてきた人たちが、戦後になって地方からたくさん出てきて都市でくらすようになると、隣に自分とはまったく関係のない人が住むことになりました。そうなるとうまいプライバシーを重視して、隣人とは無

関係に住める「1住宅＝1家族」の戦後復興住宅モデルは好都合だったのです。住宅公団ができた1955（昭和30）年から、この「1住宅＝1家族」を前提とした住宅が大量供給されてきました。

我々はいまだに「1住宅＝1家族」が理想モデルだ

と思っていますよ。デベロッパー（開発業者）も「1住宅＝1家族」を前提として住宅を供給しています。しかし、家族そのもののあり方が大きく変わる中で、「1住宅＝1家族」モデルが破綻しようとしているのです。

**萩原** 最近、高齢者が夫婦2人だけでくらししているケースが多いですよ。我が家も子どもが独立し、使わない部屋がいくつも余っている。不経済でもあり、今の家に住んでいるメリットは余りない。でも、ここに住み続ける以外に方法がありません。

**山本** 東京の都心で1世帯当たり居住人数は2人くらいしかないんですよ。しかも、高齢化している。夫婦がいて、子どもがいるという標準家族はもはや少数派です。こうした中で、デベロッパーが供給している「1住宅＝1家族」を前提と

した住宅は実態に合わなくなっています。「1住宅＝1家族」に変わるような、新しい住宅の供給の仕方を考えなければならぬ。その考えのベースとなるのが「地域社会圏」です。

### 「地域社会圏」という新たな仕組みづくり

**萩原** 山本さんは、新しい住居システムとして「地域社会圏」という考えを導入しようというわけですね。

**山本** 住宅供給システム、エネルギー供給システム、交通システム、そういう都市インフラから介護や医療、育児といった生活支援システムそのものが「1住宅＝1家族」を前提としてできています。それを根本から考え直す。「地域社会圏」では、住宅を「1住宅＝1家族」で考えるのではなく、もっと広い地域単位で住居システムを考えていくというわけです。

**萩原** それですべて「1住宅＝1家族」を前提としてできている日本のシステムを変える力になる、ということですか？

**山本** 僕が住んでいる神奈川県川区泉町という地域は、670人くらいの住民がいます。こうした地域ごとに考えていくわけです。400〜700人くらいをひとつの仮



地域社会圏

インタビュー

山本理顕

想単位として、誰が何をして  
いるか、お互いのことがよく  
分かるようにしていく。そし  
て、どのようなインフラが必  
要か、生活支援システムはど  
うするのか、地域全体で考え  
ていきます。例えばエネル  
ギーの供給システムを考えて  
みましょう。これまでのよう  
に、遠くの発電所から「1住  
宅」1家族」を前提とした各  
住居への直接供給はエネル  
ギーロスが大きい。ガスコ  
ージェネレーション（ガスエン  
ジンで発電するとともに、発  
電時の排熱も有効利用する  
エネルギー供給システム）  
や太陽熱を使って、地域全体  
でエネルギーシステムを考え  
た方が効率がいいんです。

**萩原** 一定の地域をひとつ  
のまとまりとして考えるわ  
けですね。

**山本** そうです。「1住宅」  
1家族」ではなく、地域ごと  
に対応していく。行政が補助  
金を出すとしたら、地域ごと

に出す。そして、地域は自治  
能力をつける。助け合いで解  
決できることは自分たちで  
おこなうことができるシス  
テムをつくるのです。

**萩原** そのリーダーシップ  
をとるのは誰なのでしょう。

**山本** 行政も参加するで  
しょうし、例えば、学童保育  
の指導員のお兄さんやお姉さ  
んでもいいし、小規模多機能  
施設の職員でもいい、商店の  
人でもいいでしょう。環境保  
全には建築家も重要です。重  
要なことはみんなで話し  
合って、その地域に見合った  
仕組みを考えることです。

**萩原** 地域には医療福祉生  
協の医療や介護の施設など  
があり、利用する地域の人  
たちがどのような生活をし  
ているかを私たちは知って  
います。それを大いに活用  
すべきですね。

**山本** そうですね。医療福

祉生協が地域のコアになる  
ことも考えられます。組合  
員だけでなく、地域の人た  
ちみんなの生活やコミュニ  
ティーのコアになっていく。  
地域のさまざまな団体や住  
民と深くかかわるような仕  
組みを地域社会につくって  
いく。そして、医療福祉生協  
で活躍されているみなさん  
のような方がリーダーシッ  
プをとって、地域社会のコア、  
コミュニティ・コアをつ  
くっていくというのは十分な  
可能性があると思います。

### 柔軟な発想で、 地域との協同・協力を

**萩原** 医療福祉生協では、  
独居高齢者の自宅訪問をし  
たり、住み慣れた地域で安  
心してくらし続けられるよ  
うな支援活動にとりくんだ  
りしています。

**山本** 組合員の自宅に、組  
合員が行く。それを医療福  
祉生協だけでなく、地域全

体でとりくむ。地域にたく  
さんあるコンビニの店員も  
そういう支援活動ができる  
ようになるといういなと思っ  
たんです。そのためには生協  
側がコンビニに歩み寄って、  
コンビニに地域で助け合う  
ことができるような仕組み  
をつくりませんかと提案し  
てもいいのではないでしょ  
うか。地域全体で助け合っ  
て生きていく。そういう仕  
組みを考えようというのが  
「地域社会圏」です。

**萩原** 組合員の利益のため  
に存在するのが生協で、だか  
らといって組合員だけにでは  
なく、生協として地域社会に  
どう貢献できるかという視  
点がないといけないですね。  
組合員へと向いている意識  
を、地域全体に広げていく。  
開かれたシステムで、地域の  
様々な人々や団体と手を取り  
合う。住みやすい地域をつ  
くっていくためには、私たち  
がどのような貢献ができるか  
を考えることが大切ですね。



某県営住宅

**山本** そうですね。コンビニというのはひとつの例ですが、実際コンビニは地域社会の中で重要なインフラなんです。東京では今、コンビニが約480mにひとつの割合であります。いつでも歩いていける距離にコンビニがあることになりました。しかもコンビニ業界は競争が激しいですから、地域のことをすごくよく調べているんです。この地域は高齢者が多いと分かると高齢者向けの品揃えにするし、学生が多いと若い人向けの品揃えにする。そういう意味では、地域社会のことを一番よく知っているのがコンビニなんです。こうしたコンビニの存在を利用しない手はありません。

**萩原** 私たち医療福祉生協でできることは限られていると思うんです。それをきちり認識した上で、自分たちでできることは自分たちで、みんなで協力しなければ

ば解決できないことはみんな力で力を合わせる。柔軟な発想で地域活動をすすめるといういけないですね。

## 未来の住民の尊厳につながる地域づくり

**山本** 地域住民みんなの生活が、どれだけ豊かになるかが大切です。そういう視点で医療福祉生協が地域の中で何ができるかを考えていくことですね。仕事をリタイアしてもまだ元気で、地域の中で働きたいと考えている人もいるはずですよ。そうした人々に力を発揮してもらい、みんなで力を合わせながらいっしょに地域社会をつくっていく。医療福祉生協には医療・介護の専門家がいっぱいいますよね。そうした医療福祉生協の利点を活かし、助け合っ

て生きていく地域社会の新しい仕組みづくりをリードしていったらどうでしょう。「地域社会圏」の考えのも

とに、仮に400人がいっしょに住むとします。でも、田舎の400人と都会の400人では違います。場所ごとに、地域社会ごとに問題が違うのです。地域のことをよく知っている医療福祉生協なら、田舎だったらこういうサービス、都会だったらこういうサービスをといた提案もできるはずですよ。

**萩原** 地域に根ざしている生協は、地域のことを一番よく知っているはずですよ。地域に最適なサービスとはどんなものかわかるはずですからね。

**山本** そのとおりです。医療福祉生協は、人材も地域の情報も持っている。それらを利用しながら、どこを中心にコミュニティ・コアをつくっていくべきか、いろいろ考えていくのがよいと思います。地域社会の新しい仕組みづくりにおける医療福祉生協の役割はすごく重

要ではないでしょうか。

**萩原** こうした地域づくりは、「未来の住民の尊厳」にもつながっていくと山本さんはいわれていますね。

**山本** そうですね。金儲けをしようとする、今のことしか考えない。今儲かればいいわけですから。そうなる、未来のことはほとんど考えない。超高層マンションなんかがいい例です。地域づくりは、今よければそれでいいという発想ではなくて、未来の住民に対して責任を持つということでもあるんです。

**萩原** 山本さんの「地域社会圏」という考えは、私たち医療福祉生協の活動に通じるものがあります。お話をうかがって、すごく元気づけられました。今日は医療福祉生協の次の展望について教えていただいたような気がします。ありがとうございました。



## 山本理顕さんのサイン入り著書をプレゼント!

『地域社会圏モデル』INAX出版  
山本理顕、中村拓志、藤村龍至、長谷川 豪  
原 広司、金子 勝、東 浩紀、Y-GSA 共著

3名様

インタビュー

山本理顕

本誌綴じ込みハガキにてご応募ください。